21.4.11.

「主の招きに応えて生きる」

主イエスのよみがえりの出来事を想い起こす復活節の第２周目を迎えています。春爛漫の新緑の時期となり、命の芽吹きを日々感じることの出来る躍動感あふれる時を過ごしています。子どもたちや学生の皆さんも先週から新学期が始まり、新たな環境において期待に胸をふくらませていることと思います。一方で、大阪では先週４月７日(水)から再び医療非常事態宣言が発出され、急激な感染者数の増大にともなって医療現場が逼迫していることを憂慮しますが、適切なワクチンの接種が迅速に進むことを祈るばかりです。また、自分自身を含めて、ある意味、コロナ慣れしてしまっている私たちの認識が今一度改められ、変異ウィルスに置き換わりつつある現状を正しく受け止めた上で、予防対策を講じなければと思います。新年度一年間の毎週日曜毎の主日礼拝をはじめとして、一年の教会の歩みが守られ、支えられますように祈ります。

さて、先月の３月２１日(日)以来、３週間ぶりにマルコの福音書に戻っています。ご存知のように４つの福音書の中で一番短い福音書でありますので、今年度内で読み終えることを目標に、共に本福音書を通して伝えようとしている神様からのメッセージを汲み取ってゆきたいと願っています。本日のマルコの福音書２章１３節から１７節までは、主イエスによる中風の人の癒しの場面に続く、取税人のレビを主イエスが弟子として召し出される場面となります。主イエスと弟子たちの一行がガリラヤ湖の湖畔へと出掛けてゆき、そこで主イエスが集まっていた大勢の人たちに向かって教えておられる場面から始まっています。その後、主イエスが岸辺を歩いておられると、その通りすがりに、主はある人物を目にされるのであります。それは収税所に座っていたレビでありました。このアルファイの子レビというのは、伝統的には１２使徒であるマタイと同一人物であると理解されています。主イエスがガリラヤ伝道の拠点とされたこのカファルナウムの町は、通商の中心地であり、たくさんの人や物が行き交う結果、とても経済的に栄えていました。この町はガリラヤの領主であったヘロデ・アンティパスの領内にあり、デカポリスなど、他の町から往来する人々に対して通関税を徴収しており、その収税所に座って仕事をしていたのがレビでありました。おそらく彼はルカの福音書に登場する金持ちの取税人の頭ザアカイのような立場ではなく、その下請けの立場にある徴税人であったのではと思われます。先の漁師であったペトロとアンデレの時と同じく、主イエスはこの場面においても、仕事中のレビに対して、開口一番、「わたしに従いなさい」(14節)と告げられました。福音書の記述によれば、その後、レビはさっと立ち上がり、「…イエスに従った。」(14節)と書かれています。現代の私たちから見れば、大変不思議な光景でありますが、アルファイの子レビは何故、仕事を放棄してまで、主イエスに従いゆく道を選んだのでありましょうか？おそらく、彼は主イエスの人となりとその教えについて、ある程度、耳にしていたのだと思いますが、まさか自分が主イエスから直接声をかけられ、弟子としての招きに応えて生きるなどとは、頭の片隅にもなかったと思います。漁師であったペトロやアンデレが主から招きの言葉をかけられるのと、取税人のレビが主の招きを受けるのとは、本質的に意味が異なっていると言えます。何故なら、当時のユダヤ社会においては、徴税人というのは権力者の側に立つ売国奴であることを意味しており、民衆から最も軽蔑された職種の一つだったからであります。さらには１６節に登場するファリサイ派や律法学者たちから見れば、取税人は罪人と同列扱いであり、彼らは社会から疎外され、人々と交わりを持つことさえ禁じられていたのでありました。主イエスの突然の招きの言葉に対して、ためらうどころか、引き寄せられるように従ったこのレビの姿を見る時、私たちは金銭によっては決して満たされることのない、彼の心の飢え乾きを垣間見ることが出来るのではないでしょうか？１５節以降、レビの家へ主イエスを招き入れている様子から想像するに、彼は自分のような者に主イエスが呼びかけてくれたことが、心の底から嬉しかったのでありましょう。

そのレビの家での会食のメンバーでは、他にも「多くの徴税人たちや罪人もイエスや弟子たちと同席していた」(１５節)と書かれています。ここで言う「罪人」というのは、現代で言う社会犯罪を犯した人々というのではなく、当時、ユダヤ社会において社会から爪弾きにされていた人々、軽蔑されていた人々の事をさしています。その中には取税人以外に異邦人や遊女といった人々も含まれていました。ユダヤ社会の指導者層に属する宗教的に厳格なファリサイ人や律法学者たちにとって、彼らと会食をすることなど、もってのほかでありました。現在、コロナ禍にあって、何かと国民の側に我慢を強いるようお願いする立場の人々が、多人数や深夜まで会食をしたことがメディアを通じて非難されていますが、本来、普段の日常であるならば、会食というのは人と人との交わりの形であり、お互いに親しい間柄にあり、親睦を深めるための打ち解けた場であると思います。主イエスは取税人レビの会食の誘いを快く受け入れ、そこで日頃、形見の狭い思いをしている、当時のユダヤ社会におけるいわくつきの人々とも、別け隔てなく食事を共にしたのでありました。遠目でその様子を見ていたファリサイ人たちは、ついに堪忍袋の尾が切れて、弟子たちに向かって「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか？」と言いました。つまり、一般の人々でも交わろうとしない罪人たちとあなたがたの師匠は平気で食事をするのですか？と非難の言葉を浴びせたのでありました。その言葉を耳にした主イエスは、彼らに向かってこのように告げました。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」(１７節)と、言われました。この主イエスが語られた言葉の前半部分は当時のことわざであると思われますが、後半部分は皮肉を込めてファリサイ人たちに向かって語られたのでありました。つまり「正しい人」というのは、自分たちは律法に従って正しい行いを遵守し、神の前に正しい者であると自認していたファリサイ派や律法学者たちのことを指しており、他方、「罪人」というのは、実のところ、彼らを含めた全ての人々のことを意味していたのでありました。つまり、自分たちは健康そのものであって、病とは無縁な者であると自負していた彼らこそ、実は偽善という仮面を被った、神の赦しを必要とする罪人であることをほのめかして、主はそのように言われたのでありました。

本日の場面において、主イエスが取税人レビを招かれ、さらには彼の家で会食を共にしたという記事は、今の私たちにどのようなメッセージを告げているのでありましょうか？それは主イエスが、欠けと弱さを持った私たちの良き友となって下さるために、この世に来られた御方であるということであります。主イエスがわざわざ人々から軽蔑の目で見られていた取税人レビをご自身の弟子として選ばれただけでなく、積極的に彼らと交わりを持たれたというのは、主がどのような立場にある人をも顧みて下さり、招いて下さる御方であることを表しています。イエス様が飼い葉桶の馬小屋の中でお生まれになったという出来事が象徴しているように、主はこの世界の底辺にまで身を低くして歩んで下さり、どんな人とも広い心で接し、共に生きることを選び取って下さる御方であることを教えてくれています。私たち一人一人も各々教会へ導かれた背景は異なっていますが、ある時、主の招きを受け入れて、現在に至っていることを覚えるものであります。その背後には教会の祈りがあり、多くの人々の祈りに支えられて今があることを思います。春は多くの人々との出会いの時でありますが、コロナによって人と人との心の距離さえ分断させられる今日においても、主は絶えず私たちを招いてくださり、私たちの心に語りかけておられます。「すべて疲れた人、重荷を負っている者はわたしのところへ来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ１１：２８)と、今日も私たち一人一人を招いておられる主の御声に応えて、どこまでも主に従いゆく者でありたいと願います。新たな一週間も、主のお守りとお支えのうちに新年度の歩みを進めて参りたいと思います。